

1. 日本ウイルス学会50年の歩み：私記

日 沼 頼 夫

日本ウイルス学会は医学だけでなく

この学会の素姓は歴代会長のリスト(表1)をみれば大体見当がつく。記号をつけていない無印は基礎医学で、この会長の数が最も多い。というのは会員も大体これに比例しているということになる。獣医学のV、農学(植物の他に昆虫ウイルスも入る)のA、及び理学(ファージなど)のSもある。Cという臨床医学もある。

そもそもこの学会の発足の趣旨には医学だけでなく他分野のウイルス学も一諸になって大きい広い学問を育てようとするものがあつたそうである。アメリカにはこの日本のような幅の広いウイルス学会はない。

「日本ウイルス学会25年」という座談会の記録が機関誌「ウイルス」の1978年記念号にある。「大体医学なんて人間という動物一種だけの学問だから狭い。それに対して獣医学は広い、医の十倍、ジユウイだからね、あっはっは…」というような駄洒落までとび出ている、おもしろい。

日本ウイルス学会の運営はすべて会員によって“民主的”になさるべきであるという建前はそのまま本音であつたようだ。医学によくあるところの弊害、つまり大した学問もできないのにのさばってるボスの出現を未然に防ぐためであつたようだ。ある時、本ウイルス学会も日本医学会総会の一分子としてその組織に入るか否かとなつたが、猛烈な反対に会つたという。因みにこの学会は幹事会がすべての権力をもつていた。幹事は会員の選挙による。年一回の会長は幹事会での選挙で選ばれる。そのうち毎年会長が変わるのは事務上で非効率だといふので2年交代の総務幹事という代表をおくことになつた。1970年のことで獣医の中村稔治氏がその初代であつた。

この年次総会といふか学術学会といふか、ここでは特別講演とかシンポジウムとか一切なし。一会場で、一般研究発表だけといふ。大変厳しい、こわい学会といふ評判であつた。しかし、20年、30年、40年と経つにつれて社会情勢の推移と共にこのウイルス学会も大分変貌して来た。幹事会は理事会となつた。市民公開講演会もあれば、シンポジウム、特別講演、ワークショップ、懇親会もあるようになった。

表1のC記号の会長は臨床医学分野の方であり、3名今までいたが、この分野の方は後でふれる臨床ウイルス学会の会長になることが多い。私は第1回から6回まで会長に名を連ねられている谷口、越智、寺田、福士という方々の顔は知っているが面談した記憶がない。しかし他の歴代会長のすべての方々は知っている。京大ウイルス研で私と同僚教授であつた松本清一第30回会長は医療事故で急死されて学会は川出由己教授が代理をつとめたことが記憶に生々しい。生々しいと言えば大里外善郎第41回会長もつい最近(2002年)膵癌で死去、享年70歳であつた。こんなことを書いていると切りがないのでこれ位でやめることにする。

その他の学会活動

年1回の総会の会期を外して別の期日にウイルス増殖シンポジウムを年1回催していた。“ウイルスの増殖”という生物学上の主題は当時ふさわしいものがあつた。現在のようにゲノムとかポストゲノムという時代では、何だそれは?と思われるかもしれない。しかしそれは今日の生命科学とか分子生物学のはしりを走つたといつてよいと思う。ファージを材料としたその学問の世界では、ルリアとかデルブリュックらの研究成果が新鮮に報ぜられていた時代である。

ウイルス学は“封建的”な傾向の学問世界の医学部系だけのものではない、“民主的”な傾向の非医学系、つまり獣医学部とか理学部とか農学部などの研究が重いという主張が強くていたように思う。ウイルス学会が主催した(或いは後援だったか)ファージ講習会というのが毎年催されていた。これは学問的に大変評判がよかった。ここで啓発された多くの若い研究者がいたと思う。

京都大学名誉教授
(〒610-1102 京都市西京区御陵大枝山町6丁目18-5)
A personal view on 50 years of the Japanese Society for Virology
Yorio Hinuma
Professor emeritus of Kyoto University
Goryo Oheyama-cho 6-18-5, Sakyo-ku, Kyoto 610-1102, Japan
TEL・FAX: 075-333-1851

表1 歴代日本ウイルス学会会長（所属）

	V: 獣医	A: 農	S: 理	C: 臨床
第1回 (1953)	*谷口 隼二 (大阪大学)			
第2回 (1954)	*越智 勇一 (東京大学)			V
第3回 (1955)	*谷口 隼二 (大阪大学)			
第4回 (1956)	*寺田 正中 (東京慈恵医科大学)			
第5回 (1957)	*福士 貞吉 (北海道大学)			A
第6回 (1958)	*越智 勇一 (東京大学)			
第7回 (1959)	*長野 泰一 (東京大学)			
第8回 (1960)	*東 昇 (京都大学)			
第9回 (1961)	*北岡 正見 (国立予防衛生研究所)			
第10回 (1962)	*中村 稔治 (日本生物科学研究所)			V
第11回 (1963)	*釜洞醇太郎 (大阪大学)			
第12回 (1964)	渡辺 格 (慶應大学)			S
第13回 (1965)	*福見 秀雄 (国立予防衛生研究所)			
第14回 (1966)	*植竹 久雄 (京都大学)			
第15回 (1967)	*川喜田愛郎 (千葉大学)			
第16回 (1968)	日高 醇 (九州大学)			A
第17回 (1969)	*山田 守英 (北海道大学)			
第18回 (1970)	*甲野 礼作 (国立予防衛生研究所)			
第19回 (1971)	*松本 稔 (東京大学)			
第20回 (1972)	*深井孝之助 (大阪大学)			
第21回 (1973)	*笹原 二郎 (農林省家畜衛生試験場)			V
第22回 (1974)	石田名香雄 (東北大学)			
第23回 (1975)	*金光 正次 (札幌医科大学)			
第24回 (1976)	松本 利貞 (名古屋大学)			
第25回 (1977)	奥野 良臣 (大阪大学)			
第26回 (1978)	*田島 正典 (日本生物科学研究所)			V
第27回 (1979)	*多ヶ谷 勇 (国立予防衛生研究所)			
第28回 (1980)	加地 正郎 (久留米大学)			C
第29回 (1981)	吉野亀三郎 (東京大学)			
第30回 (1982)	*松本 清一 (京都大学)			
第31回 (1983)	加藤 四郎 (大阪大学)			
第32回 (1984)	中尾 享 (札幌医科大学)			C
第33回 (1985)	大谷 明 (国立予防衛生研究所)			
第34回 (1986)	鮎沢 啓夫 (九州大学)			A
第35回 (1987)	日沼 頼夫 (京都大学)			
第36回 (1988)	豊島久真男 (東京大学)			
第37回 (1989)	高橋 理明 (大阪大学)			
第38回 (1990)	三浦謹一郎 (東京大学)			S
第39回 (1991)	森 良一 (九州大学)			
第40回 (1992)	本間 守男 (神戸大学)			
第41回 (1993)	*大里外誉郎 (北海道大学)			
第42回 (1994)	山内 一也 (日本生物科学研究所)			V
第43回 (1995)	新居 志郎 (岡山大学)			
第44回 (1996)	石浜 明 (国立遺伝学研究所)			S
第45回 (1997)	畑中 正一 (シオノギ医学研究所)			
第46回 (1998)	吉倉 廣 (国立感染症研究所)			
第47回 (1999)	永井 美之 (東京大学)			
第48回 (2000)	神谷 齋 (国立療養所三重病院)			C
第49回 (2001)	山西 弘一 (大阪大学)			
第50回 (2002)	喜田 宏 (北海道大学)			V

*2002年10月の時点で故人。

以上の他にウイルス学会の有志で同好会のように催されていた幾つもの研究会がある。インフルエンザ、インターフェロン、抗ウイルス、その他。そのうちのひとつであまり有名でないひとつの研究会があった。“新種ウイルス研究会”。家畜のウイルス病研究者が主体であったが、その

中に医学の松本稔教授（東大科研）が重きをなしていた。彼が何を思ったのか私を誘ったので、何回か参加したことがある。今思うとあれは“未知ウイルス探索研究会”だったのではないかな。

話は飛んで日本ウイルス学会と他の学会との関係について少し触れておきたい。臨床医学に直接関係する病原ウイルスの診断技術の研究交流を目的とした集り“臨床ウイルス談話会”はその後発展して大きくなり“臨床ウイルス学会”に成長した。

1984年に国際ウイルス学会が仙台で開かれた。この学会は日本ではこの時以外は今までない。しかしこの国際ウイルス学会というのはおかしなことに日本ウイルス学会とは直接関係はないのだそうである。

時代の流れで、癌ウイルスの研究が盛んになると癌ウイルスの研究発表はウイルス学会だけでなく癌学会の方へも多くゆくことになる。また日本分子生物学会が成立するとウイルスの分子生物学研究の発表はそっちの方へ多く流れる。1981年に出現したエイズという病気の学会にはエイズウイルスの研究発表が多い。ところが、その分ウイルス学会の方のエイズウイルスの演題数が少なくなっているかという必ずしもそうでない。つまりエイズウイルスの研究発表はウイルス学会でも断然多い。これも時代の反映であろう。

日本ウイルス学会が関係した社会的事件

1960年から61年にかけて日本全体にポリオの大流行があった。時恰もポリオ生ワクチン（セービン）が世界的に普及しはじめた頃であるが、日本ではその検定が終っていなかった。つまり未だこの予防ワクチンは使用されていなかったもので、さてどうするのか、日本ウイルス学会、日本のウイルス学者はこの見解を問われたのである。ところが、問題はあっさり解決した。政治的解決であった。時の厚生大臣がソビエト連邦から大量の生ワクチンを緊急輸入して、子供たちに一斉投与したのである。効果てきめん、大流行は止んだ。当時私もポリオウイルスの研究をしていた。そして、かかる事態に際しては学者の役目なんて表面では何とも問題にならない。一方においては政治的決断の絶大な力をまざまざとみせつけられたのである。

1978年スモン問題が一定の結末を迎えた。日本ウイルス学会幹事会が「スモン井上ウイルス原因説について」見解を表明したのである。井上ウイルス説は容認できないというものであった。それは北陸スモン裁判の判決に対する反論である。そもそも日本ウイルス学会は「学会は本来研究データを討論し、学問の進展に寄与することを目的とするもので学会以外の場での会員の発言に対しては学会として一々批判するようなことはしない」という見解をもっていた。それにも拘らず、社会的責任をないがしろにできなかったのである。当時、日本ウイルス学会総会ではスモン井

上ウイルスについて白熱した討議がおこなわれていたのはもちろんである。

その後になって1983年頃からのエイズウイルス薬害問題、更にその後プリオン病の薬害問題、最近ではC型肝炎ウイルスの薬害問題がおこっている。しかし日本ウイルス学会として直接これらに対応してきたことは知らない。

ウイルスとはおれのことかとビールズ言い

1950年代、つまり日本ウイルス学会発足の当初は、ウイルスではなく、いわゆる Virus はビールズ、ウィルス、ヴイルス。その他に病毒あるいは濾過性病原体という名称すら常用されていた。「ウイルス」という名称に学会で統一したのは1970年だったと思う。雑誌「ウイルス」も「Virus」であった。新聞などメディアでは「ビールズ」がずっと使用されていた。名称というのは一人歩きする。よい名前だとか悪い名前だとかに関係ない。名前なんてどうでもよいとは思いますが「ウイルス」とはどうも発音しても書いても落ち着きがない。此頃コンピューターウイルスという言葉がはびこっているから「ウイルス」はそれに名を譲って、本来のウイルスは昔懐かしい「ビールズ」に回帰したら如何か（妄言多謝）。

最近半世紀におけるウイルス学の進歩

この標題は本稿の趣旨ではない。しかしこの50年間の進歩発展はめぐるましい程のものがある。新しく発見されてきた新しいウイルスの数々、人間の病原ウイルスだけあげても、大変なことになる。おもしろいことに新しく発見されるウイルスと裏はらにこの50年間で日本から消失したウイルスもある。狂犬病、ポリオ、日本脳炎などである。またウイルスと思われていたものがそうでないことがわかったものもある。マイコプラズマ、クラミジア、プリオンなどである。またウイルス学のテクノロジー、特に病気の診断に関係する技術の研究開発の進歩にも大きいステップがみられる。一々あげられない位多い。

一方で昔は講義で「ウイルス病につける薬はない」と言われてきたが、これも一変しつつある。抗ウイルス化学療

法剤が出現し実際に普及してきたからである。予防ワクチン、これはウイルス学の花々しい舞台であった。事実、これによって数々のウイルス病は克服されてきた。日本ウイルス学会会員も少なからず、この進歩発展に貢献したことに大方の異論はあるまいと思う。

予測ウイルス学のすすめ

過去50年の回顧から外れて将来の展望に関係したことにについて少しだけ述べたい。10年ほど前にある大学で講演した時に、「現在燎原の火の如く拡大しているエイズ流行に現在大流行の分子生物学は何の貢献もしていない」と言ったことがある。それは今でも生きていると思う。

私は分子生物学の進歩発展に異議をはさむつもりは毛頭ない。それどころか笛や太鼓の組の方である。しかし、もうひとつ別の方向の「ウイルス学」も推進した方がよいのではないか、と思っている。それが仮りに「予測ウイルス学」という。

未開発地帯地域の人間を含む各種動物についての“ウイルス学”，特に未知ウイルスの検出研究を展開したら如何か、という提案である。東南アジア、南米、アフリカだけでなく中国奥地も当然入るべきだろう。要するに未開拓地域の野生及び家畜の動物（サル、ネズミ、ヘビ、カエル、ヒツジ、ブタ、ゾウなど）からウイルス検出することである。これは単なる生態学や疫学のすすめではない、それらを越えた先のウイルス研究である。

何を狙う研究か？ 将来人間を襲う可能性のあるウイルスを探究することにある。どんな方向、方法があるのか？ これはもう幾らでもあるといったらよい。現地を踏むことが最重要ステップになるだろう。伝統的ウイルス学的技術と共に最新分子生物学的技術も駆使すべきであろう。そして何よりも「若き研究者たちよ、ベンチを離れてフィールドへも出よ」と呼びかけたいのである。クーラーをみよ、エイズをみよ、さては現在のサーズをみよ、そしてインフルエンザもみよ、天然痘もみよ。若き研究者たちよ、諸君は何をなすべきか。